
行きがけのバーン・ボーイ（休載）

紘 川時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行きがけのバーン・ボーイ（休載）

【Nコード】

N3045J

【作者名】

紘 川時

【あらすじ】

ある組織によって殺された両親の仇を討つという目的の元、主人公の星匡の周りで起こるドタドタ学園コメディ

キャラクター紹介

星匡^{ほしただし}…主人公。桜坂高校2ー5、文芸部所属。両親をSK2という組織によって殺され、復讐に燃えて、SK2を殺して両親の仇を討つという目標を抱えていたが、連載が進むにつれて忘れつつある。

しかしそう思わせる台詞が少なからずある。
誰であろうと不可解な事をしてる人に話しかける習性があるのも特徴。

バラエティー番組は勿論ワイドショーなど、テレビをよく見る。

恋愛に関しては鈍感で作中でも触れられないが中野美奈子アナを好きもしくはファンという程ではないが少なからずとも可愛いと思っている。

10・13生。174cm。58kg。

林亜沙美^{はやしあさみ}…本作のメインヒロイン。匡のクラスメート。文芸部所属。美少女で学校でも男子からは結構人気な模様。事ある毎に匡が出てくることわざの課題とやらにうんざりしている。瑛美とは仲が良

い。

大学生の姉が居る。

8・12生。Eカップ。166cm 51kg。

紺屋瑛美^{こんやてるみ}…2ー5所属で匡や亜沙美のクラスメートで亜沙美の友人。父親がラーメン屋を営んでいる。

なので家に居るときは昼食は決まってカップラーメンで、すっかり飽きてしまい嫌になっている。それが元で悪魔と化したカップ麺に追いかけられる夢をよく見る。

1・26生。Dカップ。161cm。48kg。

野村覚子^{のむらやい}…桜坂高校1ー2所属。大阪で生まれ育つ。なので関西弁

である。大食いで巷では胃袋がブラックホールではないか？と言われている。茶髪でロングヘア、胸はBカップ。

ツンデレで、若干キツイ性格。

匡に好意を寄せている。

匡たちの1つ下の学年。

6・9生。158cm 47kg。

ふじながあやね
藤永絢音：

隣の城南高校3ー3。亜沙美と瑛美のバイト仲間。

美少女でおしとやかな印象。

彼女たちのそのバイト先の店長の話によると常連のオタクの中には彼女が目当ての者が亜沙美や瑛美を含む他の店員よりも割合的にも圧倒的に多いとの事。

匡・亜沙美たちの1つ上の学年。

12・21生。160cm。46kg。

やまゆかりようたろう

佐々木遼太郎：匡のクラスメイトで友人。匡の小学生時代の回想にも出ていた事から小学校以前の仲だと思われる。どこにでもいる普通の少年。

11・7生。175cm 61kg。

とうじょう

東條：2ー4、サッカー部所属。匡とは中学は別だったが塾が同じだった。

喧嘩が強く、不良っぽい印象の割に成績優秀。桜坂の近くにあるお嬢様校に彼女が居て、部活の後輩にとって憧れ存在である模様。バラエティー番組等をよく見る為芸能人関連も結構詳しい。匡の家で亜沙美や覚子たちと鉢合わせになったとき、覚子の言動から覚子が匡の事が好きと見抜いた凄い奴。

12・4生。175cm 64kg。

世湯 昌嗣まさひつ：匡の幼稚園く中学校の友人。注意力がない。それが起因して川で溺れた事がある。

これがきっかけでスイミングを習い始め、水泳が上達し、200mを1分もしない内に泳ぎ切ってしまう程。注意力も身に付けたと思われたが、赤信号で渡ったりと相変わらずである。

2・12生。170cm 55kg（現在）。

大河内おおこうち：2－5の担任。理科教師。出番が少ないせいか登場するたびに性格が変わっている。

筋肉質で、筋トレは欠かさない。

課題をわんさか出したりと、非難とも言える陰口をよく叩かれているが、赤点を採り留年の危機に頻した生徒を必死で助けようとするなどしていて生徒思いのいい教師だ。独身。29歳。同僚の藤崎に好意を寄せている。

1・1生。180cm 88kg。

藤崎 奈々美ななみ：桜坂高校で教師をしている。教科は国語。勤務中にお菓子を食べるなどの非常識な行動が目立つが優しい心の持ち主。美人でスタイルが良く、男子生徒や男子教諭から人気がある。キレたら半端ない程恐い。

9・27生。167cm 48kg。

大手治男おおてはるお：桜坂高校で教師をしている。教科は社会。

横着極まりない性格で、大河内や他の教師から”その性格どうにかして変えてくれ”などと陰口を叩かれる事も少ない。

中卒で、高校にも行かず平日の昼間からぼっつき歩いてる（不良友達とつるんで）チンピラだったそうだ。

成績も通知表に1と書かれる事も珍しくなく、元同級生からは”こんな奴がよく教師になれたな”と囁かれている。

モデルは作者の同級生とそいつがスクールバスを乗降している長崎県佐世保市崎岡町の^{おおてばる}大手原というバス停。

2・9生。178cm 68kg。

^{はやしうらきよか}

林浦聖香：巨乳美少女でアキバのアイドル。フィギュア化するほどの人気ぶりで表では可愛い子ぶってるが、性格は最悪。

街を歩いてたとき、匡に一目惚れした。

前述のとおり悪い性格が災いして、友達は少ない。仲が良い連中も彼女のメアドを知ってる者はごく少数に留まる。

モデルは作者の高校の同級生の元同級生。

5・15生。159cm 45kg。

^{なかはまたらお}

中賓太良男：2ー8所属。帰宅。両親が居ない。辛い過去を持つ。

匡と親が居ない者同士打ち解けている。

久保田とよく喧嘩するが本当は仲が良い。

モデルは作者が通う高校の商業教師と『サザエさん』のタラちゃんことフグ田タラオ。

^{くぼたいくや}

久保田幾也：2ー8所属。野球部に入ってたが辞退し、現在は帰宅。茶髪でチャラついているがシャイである。

中賓とよく喧嘩するが本当は仲が良い。天涯孤独の中賓の数少ない理解者。

モデルは作者の通う高校の教師と『サザエさん』のイクラちゃん。タラちゃんとイクラちゃんが歳が2歳違いの再従兄弟同士だったのを敢えてただの同級生の友人としている。

マスター：匡の行きつけのバーの店長。本名不明。

見た目は怖いが優しい心の持ち主で匡の良き理解者の一人。

幼少時代は父母と兄4人暮らしだった。元々一流企業の会社員だったが、社内での上下関係に嫌気が差し、退職して自分の店を建てた。

妻と子供が居たが離婚して子供も妻が引き取った。その後別の女性と再婚するも離婚。2人目の妻との間に子供は出来なかった。

といったように波乱万丈な人生を送って来た。

客の愚痴を聞いてくれるので評判もそこそ良い。

8・23生。168cm 59kg。

ラーメン屋の親父：匡行きつけのラーメン屋の店長。瑛美の父。

本名不明。店が忙しく、家の事は殆どほったらかし状態であるが、愛娘の瑛美の事は心配している。

妻（瑛美の母親）と瑛美の3人暮らし。

匡を含む常連客のみならず色んな客と喋ったりと社交的である。

3人きょうだいの末っ子。

母親を早くに病気で亡くしており、父親に男手一つで育てられた。

3・24生。167cm 60kg。

亜沙美姉：本名不明。大学生。明るい性格で友達も多く、容姿はいので同級生の男子からもモテモテ。しかし私生活では片付けが苦手という欠点がある。

妹の亜沙美に手を焼いたり逆に手を焼かしてしまったりと真面目さは大差ない。

かなりの酒好き。

12・28生。170cm 54kg。

あばた
阿畠・・・かつて匡のクラスメートだった少年。

真面目で女子からもモテていたが、実は冷酷且つ過去に少女をレイプして、補導された経歴の持ち主。亜沙美とも一時期付き合ってたが、こちらも彼女を複数の仲間とグルになってレイプするのが目的だった。もうちょっとの所で色々と話を聞きつけて乗り込んで来た匡によって成敗され、現在は退学し、少年刑務所での刑に服したの

を経て、その後の消息は不明。
8・19生。176cm 57kg。

1◆行きがけの駄賃。の筈が：

「醤油が切れちゃった…ただし匡」

「何々母さん」

夕飯を作っている母親に呼ばれ、台所へと赴く天然パーマである以外ごく普通の高校2年生・星匡ほしただしとは俺の事だ。

「煮しめか」

「そうだけど醤油がなくなったから急いで買って来て」

お使い頼まれたの何年ぶりだろう。

「ちょっとおっ見たいテレビがあるのにい」

7時からドラえもんがあるから外には出たくなかったからあまり受け入れられなかった。

＊

「どこ行くんだ？」

と、父がお使いで醤油を買いに行こうとしてる俺に訊いて来た。

「母さんが醤油切れたって言ってお使い任されたんだ」

「そうね。じゃあ匡、ついでにタバコ買って来てくれないか」

父が千円札を出して言う。

更に俺が玄関から出る間際に、

父「あっ！ライターのガスも切れてたからついでにライターもよろしく」

ついでが多すぎるぞ。

「わかったよ！　ったく親父め、好き勝手な事ばかり言いやがって」

ブツブツ言いながらお使いに行ってる間に大変な事が起きるとは…

＊

「ただいま！　醤油買って来たぞ…あれっ」

母さんがいない。何で？

「親父、タバコ買って来たぞ。釣りは小遣いにしていいんだろ…」

応答なし。

「シカトはねえだろ…うわアアアア…！！」

居間の隣の仏壇の部屋に入ろうとすると俺の目に飛び込んで来た。それは無惨な姿と化した両親だった。

辺り一面血の海だ。

「いったい誰がこんな事を…」

その場に呆然と立ち尽くしていた。

「一昨日午後7時ごろ、東京都板橋区の民家で男女の2人の遺体が見つかり、解剖の結果、何者かに刃物で刺し殺されたという殺人事件とみて捜査をしているという事です。犯人の特徴は…」

と、テレビに映しだされるニュースキャスター。

『ピッ（TVを電源を切る音）』

「俺たちとんだお尋ね者だぜ兄貴」

「追っ手が来る前に逃げるぞ」

「ああ」

何者なんだこいつら…

＊

大変だなあ。

と渋谷のスクランブル交差点を行き交う人たちが言う。

2◆復讐に燃える少女

この少女は林亜沙美。

何もない平凡な日常を送っていたあたりだけどある少年と出逢い運命を大きく左右されるとは…

そのある少年というのが俺だということは全く予想がつかなかった。

彼女はピンク髪でロングとショートの間辺りの長さで胸も『ハルヒ』の朝比奈さん並で、アイドルほどではないが見る限りの巨乳美女で桜坂の男子からも人気で外部の男にモテモテであるが、

「殺す。あいつらだけは生かしちゃおけねえ」

街中で匡が壁に手を付き呪文を唱えてるかのごとく両親を殺した相手に対する怨恨をブツブツ言っている俺に気付いた亜沙美。

匡の両親を殺害したのは研究をメインに活動している組織であり、親父もかつてはそいつらの仲間の研究員だったが、実はそいつら正体は人をいっぱい殺しているテロリストで、それを偶然知ってしまった親父だが、奴らがその話をしていたのを聞いていて、そこを見つかり、奴らが警察にチクられたらヤバいと思って、口封じの為に家族を巻き込んだ殺害に至ったという。

奴らが殺害を実行しようと家に取り込んだ際俺は丁度運が良いことに外出していたため殺されずに済んだという訳だ。

*

「運良く生き残っても身内を失った悲しみはたまったもんじゃないぞ」

「だからといっていつまでもメソメソしてたら何にもならないよ」

と、亜沙美。

「確かにそうだ」

＊桜坂高校＊

どこにでもあるような普通の公立高校。

匡は校門から校舎の間の石畳を経て教室へと辿り着く。

「無双OROCHIのタイトル由来は主人公の名前がオロチだからぞ」

俺と喋ってる中、そう言ったのは俺の友人で、角刈りで髭が濃く、眼鏡を掛けた佐々木遼太郎。

匡「そうね。無双OROCHIはよかけどき、モンハンしよったら飽きるからな」

「ヘーイ席着け。始める！日直号令」

と、教室に入ってきて教卓に手を付いているがたいのいい男性は、俺たち2ー9の担任で理科教師の大河内。

「ねえ星匡ってヤツいない？」

亜沙美が俺に話しかけてくる。

コイツ美少女で人気だからな。

周りの視線が怖い。

「ん？どした？亜沙美」

「林さん、もしかして星に告白！？星の野郎、何林さんを下の名前で呼んでいるんだ」ワイワイガヤガヤ

周りが騒ぎ立てるのも無視無視。

余談だが桜坂は1学年9クラスある。だからこんなに多いと同級生でもまだ知らない奴はいっぱいいるのである。

「ねえあんたの両親を殺害した組織とお父さんは何の研究してたの？」

亜沙美、組織に関する情報を知ってるのか。

「漢方薬とか何たらかんたらって言ってたぞ」

「復讐したいって思ってる？」

「当たり前だ。何で？」

「実は私の弟と両親も組織によるテロで殺されたの。だから奴らを絶対許さない」

「そうか。じゃあ奴らに関する情報を掴んでぶっ潰そう」

「ええ。目的は奴らを捕まえる」

後から解った？奴らのグループ名はSK2。

SK2め、絶対捕まえてやる。

＊

匡「岡山と香川の人は5大都市圏以外で唯一テレ東のアニメがリアルタイムで見られるから地方では一番上に立つ存在だからな」

亜沙美「物知りなのね匡」

岡高の皆さん申し訳ありません。

次話も続々と新キャラ登場します。

3◆紺屋の白袴

ここはとあるラーメン屋。

店主が忙しそうにラーメンやチャーハンを調理してる中、息子はカップラーメンにお湯を入れて時間が経つのを待ちながら、

「はあまたカップラーメンか…飽きちゃったな」

と、このラーメン屋の娘で黒髪のツインテールの少女が溜め息混じりに言う。

彼女の名前は近屋瑛美。こんやてるみ

カップラーメンが好物だったが毎日食べてる内に飽きてしまったようだ。

「いくら好きな食べ物でも毎日食べてたら飽きるように、趣味とかもことあることにいてたら嫌になりますよね店長」

と言って匡はラーメンの汁を啜る。

「確かに」

汗を流しながらラーメンを茹でていた店主が頷く。

＊

「『紺屋の白袴』っていうことわざ知ってるか？」

匡が瑛美に問いかける。

瑛美も桜坂高校2年で匡と同じクラスである。

「は？それは、いつも他人の為に布を染める仕事をしてる染物屋さんなのに自分の袴は染めないで白いまま履いている意味から他人の為ばかりに仕事をして自分の事は疎かにする事でしょ」

と、瑛美。

「その通りだ。昨日お前ん家のラーメン屋に食べに行っただけど美味かったぞ」

「あ…ありがとう」

「他人が飲食を楽しむ為にラーメンを作ってるお前の父ちゃんもそれに相当する」

「…そうね」

「髪が伸びてボサボサ頭になってる美容師や床屋、自宅の壁がボロボロの壁塗り職人などがあるからな。似た意味の言葉でな―」

＊

「タバコはダメですよ。お酒も控え目に。太り過ぎに気をつけて」

と、スモーカーで飲兵衛で太り過ぎのお医者さんがくわえてるタバコに火を点けながら患者の男性に言う。

机の上は敷き詰められたタバコの箱パックやビールの空き缶やらで散らかり後ろの棚にはウイスキーが大事に保管してあり、下の段にはグルメやらマージャンやら『ワインを楽しむ』やらの本が敷き詰めてあるのを背景に。

＊

「『医者の不養生』があるんだ。特にあの人」

と、匡が窓の外からその医者を指差しながら言う。

瑛美、遼太郎が同伴で。

「ん？誰か居るのか」

メタボ医者が窓に近づいて来る。

気付かれた。

「逃げろ」

＊

匡「ビビった」ハアハア

遼太郎「いきなり走り出すから」

瑛美「てゆーか『紺屋の白袴』とかそれに類する物探しっていうし
ようなない事の為だけにこんなに苦労しなくちゃならないの？」

「結構大変なんだよ」

「にしてもさあお前中野アナと知り合いだよな。今度会わせてくれ
よ。俺あの人のファンなんだ」

と、遼太郎。

「そんな簡単に会える訳ない。向こうは色々忙しいんだよ」

＊

「えっいいの！」

「明日どうせヒマだし」

何て単純な…

＊

―お台場

確かフジテレビの前だったよなあ

「ここら辺テレビでよく見掛けるぞ」

「ハイテンションだな」

人たちが行き交う中、奴を待っていた。

「ネットで調べたけどあの人、好きな女子アナランキングでトップだったからな」

と、俺。

「そう。私もそのランキング見てビックリしちゃった」

「って本人は言ってるんじゃない」

「…」 「…」

中野アナを目の前にして遼太郎の反応は、

「うわぁ本物はテレビで見るよりめっちゃめっちゃ魅力的だ！それで、デジタル化でメイク時間が従来の2倍になったらいいから大変ですよ？」

「そうなの。君よく知ってるわね。地デジ移行っていいのやら悪いのやら」

と、美菜子。

「いい面でいうと、難視聴改善、ハイビジョンなどがあるよな」

と、俺。

余談だが、何で中野アナがヒロインなのかというと、実在する女をモデルにしたものはクレームが怖い上、オリジナルを考えるも他作品と被ってたら著作権法違反にひっかかるので仕方なくそうなったという経緯があるのだ。

そして美菜子はサインを遼太郎に書き、フジテレビの社屋へと消えて行くのを見送ったのである。

4◆郷に入っては郷に従え

畳の上に座布団を置き、正座して50〜60代くらいの中年のオッサンが、

「畳の上は靴を脱げ！」

と、靴を履いたまま部屋に入ってきた外国人にそう指摘する。

「オオスミマセン」

と、外人。

＊

そんなやり取りを劇中でしていたドラマを匡が耳に手を当て肘で畳に付いて横になって見ていた。

「アメリカでは家の中でも入浴中と寝るときを除いて靴を履いてるからな：無理もねえよ。日本では家に入る際に靴を脱ぐ習慣があるなんて知らないから。『郷に入っては郷に従え』その土地にいったらその決まりに従えってな」

そう呟く俺。

＊

俺はコンビニに行く為に街を歩いていると、

「ビールいかがですかぁ」

明らかに見たことがある少女が露出度の高いワンピース(?)を纏って、スーパーの前で酒の試飲のバイトをしている。

「こんなところで何やってんだ？」

と俺は言う。

「見れば解るでしょ。実はウチ、：両親が居ないから自分でして稼がないと生活出来ないから私もこうやってバイトしてるの」

余程家計が苦しいんだな。

「よかったら試しにどう？」

プラスチックで出来た小さめのコップに入った試飲用のビールを俺に差し出す。

「いらんに決まってるだろ！！俺まだ未成年だぞ」

俺の父も酒、どちらかと言ったら弱い方だった。

＊

その後、俺は亜沙美宅へと赴いた。

2階建てアパート。

「『郷に入っては郷に従え』ってことわざ知ってるか？」

と、俺。

亜沙美「他所の土地に行ったらその土地の掟おきてに従わなければならない
い事でしょ」

よく知ってた。

「そう。長崎県佐世保市のある高校では校門を出入りするときに
必ず礼をしなければならないし、朝のHRでは心機四則っていうの
を全校生徒で唱えるなんてその学校ならではの風習があるんだ」

因みに心機四則とは：

一、真理を愛すること

一、寸陰を惜しむこと

一、清浄を行ずること

一、和敬の念あること

「卒業するまで毎朝繰り返し言わなければならないとは面倒くさそうネ」

と、亜沙美。

「日本では20歳から酒飲んでもいいけどアメリカでは酒飲んでいいのは21歳からだったのしってる？」

そこに現れたのは何か明るい印象の林真奈美。

亜沙美「お姉ちゃん」

匡「つまりあれだろ。20歳の日本人がアメリカで酒飲んでて警察に見つかって『日本では20歳からお酒が飲める』って言い訳は通しない」

「そういう事。てあんた誰？ 亜沙美の知り合い？」

「文芸部仲間でちょっとした腐れ縁みたいものなんだけど」

「何だお前姉ちゃん居たのか。林家で生き残ったのはお前1人だけかと思ったら」

まあ心規四則は近々健八先生っていう作者は自分が書いてるもう一つのケータイ小説でもネタにしようと思ってる事だろう。

＊

夕日が落ちようとして若干ながら薄暗い帰り道、俺は考えていた。

にしても一刻も早く奴らの情報を掴まなければ。

「待ってろよお。必ずS K—2捕まえるから、父さんも母さんも早く成仏してくれ」

5 ◆ 転ばぬ先の杖

匡は文芸部仲間の瑛美と亜沙美とバイキングへ食事に行った。

「さあ食べるぞ」

と、胃薬を飲みながら力込めて言う匡。

＊

「もうダメだ…死にそう。胃薬飲んだのに…」

亜沙美「もう調子にのるから」

「にしてもあの娘凄いな。俺たちが来る前から今も尚食べ続けてるぞ」

匡が言うあの娘とは、大食いで巷ではブラックホールの胃袋を持ってる^{もて}と恐れられている黒髪のロングヘアーでなかなかの美少女、野村 覚子^{めいこ}。

「そういえばそうね。いつまで食べるつもりなのかしら」

と、瑛美。

「誰やねんあたしの噂してるんは」
しかも関西弁キャラだ。

＊

「いつまで残らなきゃなんねえんだ」

と、担任大河内。

「じゃあ僕は見たいアニメがあるんで失礼します。一応予約してき
たんですけど『転ばぬ先の杖』っていうし」

と、鞆を肩にからった男性教師は職員室を後にした。

彼の名前は^{おおてはるお}大手治男。

「何が『転ばぬ先の杖』だ。大手先生見たい番組があるからと言っ
て帰るなんて横着ですね、藤崎先生」

「いいんじゃないの」

ポッキーをボリボリ食べているのは国語教師の藤崎奈々美。ショ
トヘアーで年齢は20代後半でかなりの美人。

＊

「何か違う描写が入ってたが、世の中用心に用心を重ねても却って
失敗するんだよ」

と、俺。

瑛美「確かにそうね」

匡「例えば：風呂の温度を確認したらあまりにも熱くて火傷したら洒落にならないからと言って湯船に大量の冷水をドバ～っと入れてぬるくなり過ぎてまた追い焚きしなければならなくなったりするんだ」

「…それ、そいつが馬鹿なだけでしょ」
と、瑛美。

「なあつまらんでこの小説。あんた主人公なら冒険とかしたらどうや」

と、覚子。

こんな形での新キャラ登場もあるんだね。

彼女は偶々（たまたま）通りかかったときに見たことある顔があったから反射的に話しかけたのである。

「あっオマエはさっきの。それが作者はそんなのはあまり好きじゃないらしいんだよ」

と、匡がだるそうに言う。

すると空から雨がポツポツ降って来て、やがて激しくなる。

「何なのよ。天気予報では雨マークなかったなのに」

と、亜沙美。

匡「こんな事もあるのかと…」

俺は所持していた折り畳み傘を取り出す。

「『備えあれば憂い無』ってな。入るか？」

覚子「遠慮しとく」

瑛美「あたしも」

亜沙美「あたしもパス。付き合っても居ない男女が相合傘なんて滅相もない」

「そうか」

と言って俺は傘を畳んだ。

＊

「慎重に慎重に…」

匡（小学生時代）が渡ってる川が浅いのに緊急用の浮き輪と潜水道具を準備し、用心深く渡っている。

「何やってんだ匡。浅いから大丈夫だよ」

と、世湯昌嗣よとうまさつぐという匡の友人でのこぎり頭である以外至って普通の少年。

「相変わらず用心深いな」

と、遼太郎。

昌嗣が川を何の用心なしに渡っていて途中から深くなっているのに気づかず溺れてしまった。

「何だ：助けてくれえ」

匡「マサ、これに掴まれ！ 遼太郎、後ろから俺を引っ張れ！」

「解った！」

匡・遼太郎「せーの」

匡が用意していた救命浮き輪を昌嗣の方向に投げた。

＊

「一遼太郎と2人係で昌嗣を引っ張り上げたから対応が早かったから大事には至らなかったものの、これがトラウマになってな、ただでさえ用心深い性格だったのにますます用心深くなってしまった」

瑛美「トラウマって意外と怖いからねえ」

覚子「その昌嗣って奴、あたしらと高校同じ？」

「いや、違う。あいつとは中学まで一緒だったけど高校は別々になった。どこ高に通ってるのかというと、豊栄工業だ。ほうえいまああいつもあの事故をきっかけに用心する事がどれだけ重要か解ったんないけど」

「あつ雨上がってるで」
と、覚美。

瑛美「えっ」

匡「ほんとだ」

＊

「車来てねえな大丈夫だろう」

と、昌嗣。

押しボタン式信号のボタンを押さずに車灯が青、歩灯が赤のままの
状態で横断歩道を渡って行った。

相変わらず注意力ゼロである。

6 ◆爆発する新幹線（前書き）

最初と最後で内容が大きく異なっています

6◆爆発する新幹線

「17時59分55秒か…あと5秒だな…4…3…2…1…」ピツ
すると18…00に東京駅着の新幹線のぞみが激しく大爆発する。

勿論周りは騒然としている。

負傷者多数で東京駅前は沢山の救急車で埋め尽くされ、スーパーアンビュランスという大勢の人間を一度に病院へ搬送する大型救急車も4、5台出動する始末。

緊急特別車両にのみ許可された赤いサイレンがグルグル回っており、これがさすがにいっぱいあると吐きそうになる。

「大丈夫ですか？」

と、被害者に問いかける救急隊員。

車内は勿論だが、駅のホームは至るところに血の海が散乱している。

生き地獄と言っても過言ではない光景だった。

いったい誰がこんな大掛かりなテロ事件を。

「紛れもないテロじゃねえか。誰の仕業だ？」

と、テロの惨状を目の当たりにしてひきつった表情の亜沙美。

匡「まさか…SK2…」

亜沙美「えっ何それ？」

匡「指名手配中のテロリスト知ってるか？」

亜沙美「ああポスター見たことあるわ。懸賞金もハンパない額だった」

「このテロもあいつらの仕業なの？」

と、亜沙美。

「恐らくな」

と、俺。

「こんな罪もない人たちを殺傷して、許せない」

亜沙美は奴らの所へ行こうと歩き出す。

「やめろ。そんな鉄槌と称して潰すなんてしたら却って大きな復讐を喰らうぞ。悔しいがここは手を引いた方がいい」

と、俺。

＊

新幹線爆破テロのニュースを商店街の電気屋のTVで見た後、オモチャ屋の前を通り掛かったとき、

「買って買って」

「ダメ」

オモチャをねだる子供にその母親と思われる女性が心を鬼にして言った。

「心を鬼にする、か。いくら可哀想だと思っても、甘やかしたら為にならないから厳しくするって意味」

「なるほど。叱られる事なく甘やかされて育った結果があれね」

と、亜沙美が横着かつ我が儘極まりないどっかの誰かさんを指さして言う。

「おい、小娘、指差すな。誰が横着かつ我が儘だって。ナメてんのか」

と、そいつ。

「亜沙美、お前バカか！」

亜沙美の襟首を掴んで逃げる俺。

「あがん事して、ボコされるのは俺だぞ。もって考えてから発言せろや」

一目散に逃げて路地裏へと逃げて来た俺は息を整えながら言った。

「ん？ あら偶然」

そこに居たのは教師藤崎奈々美。

「藤崎先生」

勤務時とは対照的に繁華街を歩いてるとよく見掛ける派手な私服のギャルのような恰好をした美人教師は、

「勉強は大丈夫なの？ 遊んでばかりいて」

教師というものは、いつもこういった事を訊いて来る。

「実を言うと…あたしの父はあたしが何をしても叱らなかった。だから甘やかされて育てられたものだから物凄く我が儘だから…」

この年増女、何企んでいるんだ。

藤崎「ジュース持って来なさい」

匡「はい。ただいま」

っていくらなんでもあんまりじゃねえのか。もしこれが同年代かつ男だったらどこか大きな施設の裏に連れ込んでるところだ。

藤崎「あっ気が変わった。チョコレートが食べたい」

亜沙美「解りました」

＊

「親に叱られる事なく育った人間がどれだけ好き勝手なのか解った？」

：

「んなもん死んでも解りたくねえよ」

と、目の下にくまらしきものが出来た状態の俺。

「お前も自分が中心になったら偉そうに」

と、大手が帽子で藤崎の頭をポンと叩く大河内。

「大河内先生、奇遇ですね」

と、藤崎。

「ああ何かどっかで見たことある顔ぶれが揃ってるって思ったら何だかんだ言っても騒がしい一日だった。」

＊

亜沙美「てゆーか『リベバン』のメインヒロインって誰？」

「えっそれは…」

と、ひきつった表情の俺。全然考えてない。

7◆ヒロインは？

「よく考えたらこの小説、女性キャラが多い割にはメインヒロインに相当する女がいないなあ」

と、俺。

遼太郎「ああたしかに」

「いくら女キャラがいっぱい居るからって、ヒロインに当たる女は最低でも1人は居なきゃダメだろ」

と、こいつも俺の男友達の1人で不良っぽい反面成績優秀で身長は175センチ位の東條^{とうじょう}。

「確かにな。そうだ…『とくダネ!』録画したヤツ見るか?」

両親の亡き後、俺が元々住んでた家を潰し、近くにあったマンションに引っ越し、そこでのやり取りである。

「いい、それワイドショーだろ。そんなマニアックな番組観る気になんねえ。ほんと星、お前、作者の性格がそのまま反映しちゃってるせいかしょーもない」

と、テーブルに肘をついた手の上に顎を乗せた遼太郎。

「まあとにかく、例えばだ、遼太郎、ヒロインはどんなタイプの女がいいか?」

「うーんツンデレ系…スポーツしてる娘も萌えるし…」

「東條、お前はどのタイプの女が好きや？」

「俺は、胸がでかくて色っぽくてエロいのがいいな」

「俺はハルヒのようなSっぽい女が好きだけど話変わる。『スーパーモーニング』はな、2009年3月27日まで全国全ての地域でオンエアされてたからな」

遼太郎「知らんがな」

と、一蹴。

「てゆーかテレビ何のありよる」

と、東條がリモコンを手にし、テレビのスイッチを入れた。

『相棒』の再放送があつた、かつ俺は相棒に嵌まっており、東條がチャンネルを変えようとしたら、

「相棒ば見るから変えんな」

東條がリモコンを横取りした。

「匡、お前こんなオッサン臭い刑事ドラマのどこが面白いんだ？」

「とにかく面白いから。お前らも見よったら嵌まるぞ」

匡によってシリーズ化した大人気作といっても別に見たくもない刑

事ドラマを見せられた遼太郎と東條だった。

＊

「見たら面白かったね。映画化もしてるだろ」

と、遼太郎が匡に訊く。

「ああ、俺映画館まで見に行っただぞ」

「俺も今度DVD借りて観ようかな」

「お前も相棒の面白さが解ったか」

東條「ところで、この話の本題は？」

「あつ、」「あつ、」

すっかり忘れてたようだ。

＊

「そうだ。ヒロインが誰かだなんて女に討論させればいいんだよ」

と、匡が手招きならぬ顔招きをした。

「匡くん家初めて来るわ」

と、瑛美。

「散らかってるやんけ。匡、たまには片付けええのに」

と、覚子。

「何、あたしたちを呼び出して」

と、亜沙美。

「おおみんなかわいいじゃねえか。どうせならコイツらのいずれかでいいんじゃないね」

と、東條。

匡「勘違いするな。合コンするんじゃないぞ。お前ら座れ」

東條「お嬢様方、俺と遊ばない？」

すると覚子が東條に目潰しをくらわせ、

「ノーセンキューです」

その場に倒れてしまう東條。

「お前バカか！何ナンパしてんだ」

と、俺。

＊

「という訳でだ。この『リベンジ・バーン・ボーイ』のヒロインは
どういう女が相応しいのか」

斯くして、ヒロインは誰が相応しいか討論が始まった。

亜沙美「ヒロインといったらあたしでしょ。新幹線が爆発するエピソードで匡と一緒に居たし」

瑛美「何言ってるのあたしよ。登場回数はあるたよりもあたしの方が上回っているのよ」

「あんた胸ないでしょ」

「煩い。人が気にしてる事をよく言えたわね。胸がでかくてもどうせ年寄りになったらシワシワになっちゃうよ」

「ムカつくう」

「何喧嘩してんでんあんたら。最終回で匡と結婚するのはウチがヒロインやで」

と、覚子が反射的にとんでもない事を口にしてしまい必死で口を押さえる。

「えっその関西人女、もしかして匡の事好きなんじゃ…」

と、遼太郎。

「ちやう。今のは冗談に決まっとるやろ。見たいTVあるから帰る」

と、俺の部屋を後にした覚子。

遼太郎「何やあれ」

東條「さあ。もう遅いから俺も帰るか」

と言って立ち上がる。

「あーあ結局曖昧に終わったな」

と、俺。

「こんな話し合いしなくてもその内現れるだろ。じゃあな」

遼太郎も俺の部屋から退去した。

「亜沙美、お前まだ帰んねえのか？」

テンションが低い状態で訊いた。

「気付かないの。ヒロインはあたしだからね。瑛美とこの事で言い争いになったけど、設定上そうなってるから」

「悔しいけど認めるしかないようね。待って亜沙美」

と、亜沙美と瑛美が立ち上がって歩いてゆく中とすれ違いになる新

事実を聞かされて呆然と立ち尽くす俺。

＊

「マスターいつもの」

匡は行きつけの喫茶店でお茶を飲んだ。

「でさ、マスター、朝のワイドショーって『スツキリ』と『とくダネ』」

と『スーパーモーニング』のどれ派かな？」

「相変わらずしょーもない事好きだな匡くん。俺は、テレビ朝日の『スーパーモーニング』派かな。『モーニングショー』の時代からずっと見てるし、スパモニに変わってから結構長いから、今考えてみたら歴史を感じる。しかもモーニングショーは日本初のワイドシヨ―番組だから」

と、マスター。

「俺は『とくダネ!』派かな。何せ中野ちゃんのファンだからな。フジのアナウンサーの」

「嗜好は人それぞれか。俺は赤江ちゃん可愛いって思うけどねあ。てゆーか俺、好きも嫌いも気にしない太刀だし」

マスターとのどうでもいい話が始まった。

7◆ヒロインは？（後書き）

8◆対岸の火事

「『今日チリで大地震がありました。被害は…』」

TVに映し出される地震の爪跡を残した被災地を見た匡が、

「大変だね」

としか言いようがないのである。

メキシコに大地震が襲って来ても津波の影響がない限りは対岸の火事だ。

喩え向こう岸で災害が起きてても自分が住んでる土地には全く関係がないという事だ。

例えば自分は赤点がなかったが、クラスメートが赤点採って補習に呼ばれたり、芸能人夫婦が離婚したって報道を聞いてもそれと同様だ。

「他に”対岸の火事”と同じパターンはないかな」

と俺が秋葉原を歩いていると、

「あれ、匡」

亜沙美と偶然バッタリ会ってしまった。

「亜沙美、どうしたんだ？その格好」

と、驚く俺。

何故驚いてるかと言うと、

「何その、アキバのオタクが喜びそうな格好は」

「これ？」

メイド服姿だったのである。こいつの顔はいつも見ているのに輝かしく見えた。

何だこの胸の高鳴りは…

「ちょっとした知り合いが入院しちゃってその代理をしてるの」

あまりにも可愛すぎて見とれてしまった。

「ん？どうしたの？」

「いや、何でもない」

＊

「しかしよおお前もよくこんな恥ずかしいバイトしようって思ったな」

「あら匡、奇遇じゃない」

「誰、瑛美の知り合い？」

と、現れたのはメイド服に身を纏った瑛美。

「瑛美と、後もう一人は？」

「あ、この子は」

亜沙美と瑛美の知り合いのようだ。

「藤永絢音です。あんたは？」

「俺は…星匡だ。以後お見知り置きを」

と、相互に自己紹介をして、俺は注文したカフェオレを啜りながら、

「という訳でお前ら、本題に入るぞ」

亜沙美「えっ」

絢音「何、本題って」

＊

「町をウロウロしていると、意外とあるものなんです」

俺は語り出す。

「あるって何が？」

と、絢音。

”対岸の火事”ということわざがな。ニュースに」

絢音「ニュースなどでよく報道される事件や事故なんか、こっちにしてみれば言っちゃ悪いけれども全く関係が無い」

「宮崎なんか民放が2局しかなくTV事情が日本で一番悪いなんてあたしらにしてみれば『そうなんだあ』てしか言いようがない」

「おい、そんな事言ったら…。」

「こらあ！宮崎をバカにしてんのかあああ」

と、宮崎県民たち。

その中には『どげんかせんといかん』でお馴染みの東国原知事もいた。

匡「ホラ、そんな失礼かつ理不尽な事をよく言えたもんだ」

「何なの」

怪訝そうに言う絢音。

「まあ気にしなくていいから。あんたらもケーブルテレビに加入すれば4局地帯の熊本や鹿児島放送局が見れるよ」

と、亜沙美。

「あっ確かにそれもそうだ」「そうだな」

と、奴らはそのまま退去していった。

＊

俺たちが辿り着いたのは、秋葉原のアイドルがよくコンサートを開いているステージで、オタクたちがうじゃうじゃと行き来している。ステージでフリフリな衣装を身に纏った可愛い女の子が熱唱している。

そんな中、

「キヨカちゅあーん！」

と、ステージの前のオタクたち。

アキバアイドルの、ショートヘアーで巨乳美少女、キヨカこと林浦聖香のライブがっている。

「…へたくそが歌うな…」

と、絢音。

「アア、あいつらもああいうののどこがいいんだ？」

「あのオタク共は好きなアイドルを目の前にしてワイワイ騒いでいるのは、こっちからしてみれば嘲笑したくなるわよね」

と、亜沙美。

「これも外国の大地震同様”対岸の火事”だから大変だねえってしか言いようがないね。オタクたちが（あいつら）がここまで落ちてしまったのも余程の事情があるんだな」

と、俺。

「私実は好きな人がいるの。名前はー」

「ええ」「ウソだろ」「そいつキヨカちゃんを落としやがって、ボコボコにしてやるわ?!」

「そうだそうだ。そんなの認めん！聖香ちゃんは俺のモノだああ」

と、バンダナ被り、リュックを背負って若干肥満体で小柄な工文。のりふみ

今後匡らと接触する事になるだろう。

聖香の惚れた男というのが誰なのか写真を公表した。どうでもいいのにそっちへ目を向けると、それはビックリ仰天のレベルじゃない程心当たりのある顔だった。

如何にも『ドラゴンボール』の悟空を意識してるような髪型と、至

って普通の顔立ち…俺に物凄く似ていた。

「Ⅱこの子です実はこの前街を歩いてたとき、一目惚れしちゃったⅡ」

おいおい恋愛禁止令は出されてねえのか。

「あっ、居た！」

俺の存在に気づき、聖香は舞台から下りて、走りながら俺に近づいて来た。

「貴方だったんですね。好きです。あたしと付き合って」

TPOわきまえろや。

ヤバイ…袋叩き喰らいそう。

「そんな…おい、あいつボコそうぜ」

「ああ」

「やっちまえ！」

奴らが一斉に俺に襲いかかる。

うわあ亜沙美い絢音さん助けてえええ、と悲鳴を叫んだのは言うまでもない。

*

俺、星匡はほぼ瀕死にさせられながらも、

「対岸の火事の筈が自分の住んでる所にも被害を及んだようなパターンじゃねえか…ああ東京の空は綺麗だ…」

「大丈夫？」

亜沙美が倒れてる俺を東京タワーの最上階から地上を見るように首を下に向けて言う。

「ん？」

そういえばこの女、今日ミニスカートだったっけ。

…パンツがはっきり見えてしまった。

「見たでしょ」

と、顔を赤らめながら言う亜沙美。

「これは誤解…」

俺は亜沙美に思いつきりド突かれた。
しかも何発も。

袋叩きを喰らった上から更にボコされて、お陰で身体はボロボロである。

匡「亜沙美、待ってくれ。誤解なんだってば」

亜沙美「知らないっ！」

絢音「匡くん何亜沙美を怒らせてんの？」

匡「いや…それは…」

＊

「星 匡允^{ただよし}の息子、匡…親の仇を討つべく俺たちを探してる。あの小僧興味があるな」

と、S K 2の兄貴分。

「兄貴、俺たち人をいっぱい殺してる賞金首だから、居場所がバレて捕まったら最期、何年刑務所に居なきゃならねえか解らないんだぞ。そんな匡とかいう少年に気がかりだからといって下手に表には出ない方がいいですぜ」

と、弟分であるもう1人がP S Pのガンダムをしながら言った。

9 ◆売り言葉に買い言葉

俺たちが通う桜坂高校。

—2—8教室—

バカ、アホ、マヌケ、トンマ、

と、タラチャンヘアーの少年と茶髪の少年が悪口の言い合いをしている。

はつきり言うところから見れば非常にレベルが低い。

ボコ、ボコ、

やがて殴り合いの喧嘩になっていた。

「何やってんだお前ら」

と、丁度通りかかった俺が言う。

タラちゃんヘアーの方は中賓^{なかはまたらお}太良男、茶髪ヘアーの方は久保田幾也。

「俺が機嫌悪そうにしてる横からコイツがいきなり『よっタラちゃん』って言って来たんだ」ハアハア

と、中賓。

「お前いきなりキレるから…そこまでムキになってキレんでもいいだろ。」

と、久保田。

＊

その放課後、俺はその中賓と久保田の3人でファミレスに寄り、ダージリンティーを啜りながら一服していた。

「奢ってもらうなんて悪いな。中賓」

久保田「そう悪びなくてもいい」

匡「で、俺に相談ってなんだ？」

中賓「それがよー」

中賓が語るのは涙なしでは聞けないあまりにも悲しい話である。

回想スイッチON

＊

これは中賓が小学生のときの話である。

中賓の父親はエースコンバットオタクで、ゲームも全クリし、その飛行機のプラモを多数コレクションにしている。

中賓ともそれで話を通じるのだったが、実際は定職に就かず、競馬・パチンコが趣味で妻に当たる中賓の母親にいつも金をせびっていた上、酒好きでもあるらしく居酒屋で仲間と飲めばその仲間と殴り合いの喧嘩をして、家で飲めば暴れまくってたそうだ。

「あんた酒ばかり飲んだら…」

「うるせえ！こっちは競馬で負けてイライラしてるんだ！飲ませろ！」

ムチャクチャである。

中賓「まあ。母さん、痛い目に遭いたくなかったらここは足を引いた方がいいよ」

「太良男、あんたもあの人に暴力奮われてるのよ。何肩持つような事言ってるの」

「いやそういう訳じゃない。オイラは母さん何も罪がないのに父さんにボコされないようにしてるだけだ」

「そう」

＊

「ん？あれ？母さん、母さん」

数日後、朝起きるとオフクロさんの姿が無くなってたらしい。

「母さんなら出てったよ」

と、親父さん。

「他人事みたいに言うなよ！母さんが出ていったのは父さんのせい

だからね」

太良男のいう通りかもね。

中賓はそのまま一目散のごとく走って出ていった。

＊

その後中賓の親父さんは焼酎の飲み過ぎ……によるアルコール中毒で亡くなっている。

中賓は、親父さんが死んだ際顔を白い布で覆われた亡骸を眺めながら、

「なんてこった…酒ばかり飲むからいつかこうなると思ってたんだ…」

と、涙目になりながら言った。

そして中賓は親戚の家に引き取ってもらった事になった。

飛行機のプラモは親父の仏前に飾ってるそうだ。

「一へえお前も苦労してるんだなあ。でも母親はあくまで行方不明でまだ生きてる可能性があるんだろ」

「ああ」

「じゃあまだマシだ。俺なんか一遍に両親を亡くしてるから」

「ええウソオ」

久保田も驚いている。

匡「中賓は行方不明になった母親を捜し出す―」

中賓「星は父ちゃんと母ちゃんを殺害した野郎共を捕まえてぶっ潰す、お互い目的があるって事だ。いいか星、逆にそのそいつらに殺されたらタダじゃおかねえぞ！」

「解ってる」

久保田「何熱血になってんだお前ら。タイトルに冠してあることわざは何だったの？」

ありやりや、初めてツツコミオチになっちゃった。

10◆ひょうたんからこま

亜沙美「昨日大金拾う夢見ちゃったわ」

それはそれは凄い夢だ。

「ホント！？あたしなんかカップラーメンに追っかけられる夢ばかり見ちゃう」

どんな夢だよ。

「亜沙美ちゃん、もしかしたら正夢になったらもっとビックリだよな」

と、俺。

「は？」

＊

―東京都世田谷区某所、亜沙美宅―

「ただいまー」

亜沙美が学校を終え、自宅へと帰る。

「あ、丁度よかった。いいものあるからちょっと来て」

亜沙美姉が亜沙美に対し手ねまきをしている。

「何？」

何が何なのか解らないで居る亜沙美。

「ほら、これ拾った」

姉の手元にはトータル200～300万はあるだろう、ビックリするくらいの大金があったのだ。

「うわぁ何これ、何処で拾ったの？」

と、驚くのも無理はない。

「道端を歩いてたら落ちてた」

能天気述べるお姉さん。

「ネコババはダメ！早く交番に届けて来なよ。持ち主探してるかもしれないよ」

「ええせっかく手に入れたのにい」

「はい四の五の言わずに持って行く」

姉よりも妹がしっかりしているのであるこの系統は。

＊

「しょうもないってそんな話…ん？」

「どうしたんだ？ 遼太郎」

「何やってんだろ。あの人」

遼太郎が指差す先には大金の中から金を抜き出そうとしている亜沙美姉の姿が。

匡「亜沙美の姉ちゃんじゃねえか。そんな大金どうした？ 競馬か？ それとも宝くじか？」

「え、林の姉ちゃん！？ マジかよ。あいつに似てかなり美人じゃん」

と、遼太郎。そんな事言って何も知らないで：

「拾ったの」

「てゆうーか今抜き出してたの見てた？ 今の見てたでしょ？」

遼太郎「え？」

「これ見なかった事にしてね。1万ずつあげるから」

「本当ですか！？ ありがたいなあ」

って、拾い物だろ絶対。交番に持って行かなきゃダメじゃないか。

匡「遼太郎、そんな金早く返せ！」

「匡何ムキになってんだ？」

「亜沙美ちゃんってあんだが大金拾ったの知ってる？」

「うん。あたしあいつに言われてこれ交番に届けに行く所なの」

これは正に：あの女からしてみれば『ひょうたんからこまが出る』だな。

「は？ひょうたんからこま？」

基本知らないんだな。人達は。

「早い話、嘘から出たまことに意味が似てるんだよ。例えば」

友達に”今日抜き打ちテストがあるぞ”ってからかったら、その日本当に抜き打ちテストがあったり、とある友人が”俺テレビに出るんだ”っていつも言うから”どうせ冗談だろ”って聞き流してたけどある日公園に行ったらテレビカメラとか色んな機材を構えたテレビ局の連中が居て、誰を撮ってんのかと思ったら例の友人だったり、冗談で言ったつもりが本当になっちゃうということわざである。

他にも”昨日宇宙人と友達になっちゃったよ”なんて言う奴が居たからどうせ嘘だろ、と思って相手にしてなかったが、まさかまさかそいつの上空からUFOに乗った宇宙人が”コンニチハ”だなんて手を振りながら挨拶して来たり、さすがにこれは現実離れしているけどね。

亜沙美姉「なるほど」

そんな事言いながらこの女、本当に解ったんだろうか。

＊

「あの大金の落とし主がすぐに現れてな、あの女2、3割程度謝礼をもらったそうだ」

と、俺は亜沙美にそう報告する。

「そう。だからあたし昨日ファミレスで沢山奢ってもらったんだ」

「それはよかったね。お前正に『ひょうたんからこま』だったな」

「え？」

瑛美「また始まった。匡のことわざ教室」

呆れさせてすまないな。

「まあ基本的に冗談で言った事や夢に出てきた事が本当になってしまっ
まうパターンなんだ」

俺も経験した事がある。

飛行機のラジコンで遊んでる夢を見た後実際に父さんから買ってもらったラジコン飛行機が夢で見たのと全く同じモノだった。

「あたしもあるよ」

と、瑛美。

「夢の中でカップラーメンを追いかける夢をよく見るんだけどある日昼に出されたカップ麺が偶然それと同じデザインだったって事があるわ」

匡「は？どんな夢だよ。それ」

＊

「近々仙台でもテレビ東京系見れるようになるよってでっち上げを言っていたら、アナログから地デジに切り替わるのを機に宮城にテレ東新局が開局するらしくて、今の時点ではまだどうなるか解らないけどもしそれが実現したら”ひょうたんからこま”だ」

と、オチでとんでもない事を口にする俺であった。

瑛美「は？」

11◆あばたもえくぼ（前書き）

今回のしょうもなくありません。
なのでじっくりと読む価値があるのではないでしうか。

11◆あばたもえくぼ

亜沙美の隣に座っている爽やかボーイ、最初は亜沙美なんとも思っ
てなかったけど徐々に惹かれていったようだ。

しかしながら真剣なときもニヤけているのが欠点で”何やコイツ”
って思われてるけどそれもカッコよく見えて来るらしい。

「(阿^{あばた}畠くんいつもニコニコしててステキ…?)」

阿畠というその少年は、先述にもあった通り爽やかな印象が特徴で
女子からモテモテな様子であるが、実はコイツ、冷酷極まりない男
だというのは、今の亜沙美には知る由はなかったのである。

匡「何だって!あの女阿畠と同棲するだと」

遼太郎「そうらしいぞ」

知らない内に亜沙美の奴、阿畠に告ってOK貰い、付き合い始めた
のは別構わないが同棲って…お前らまだ高校生だろ。

瑛美「ねえ」

亜沙美「何?」

「同棲はいくら何でもヤバいって。親に許可しないでしょ」

「お父さんもお母さんもダメって言ったけどあたしはそんな反対を
押し切っている」

聞く耳を持たないようだ。

匡「おい、阿畠」

「何？星」

「お前亜沙美と同棲するって本当か？」

すると阿畠はすんなりと、

「ああそうだが。それがどうした？」

「いや、あいつが言ってたから：てか同棲しようなんて言い出したのどっちだ？」

「2人で話し合った結果だ」

「そっか。くれぐれも謹慎になるような事するなよ」

と俺はそう言い残し、阿畠の前から退去した。

＊

匡「ええ何だと」

遼太郎「阿畠の奴、女を監禁して補導・逮捕歴があるそうだ」

匡「それどこで知ったんだ？」

遼太郎「偶々耳にしたんだよ。もしかしたら林危ないぞ」

「アイツ…」

何も知らずに楽しみに阿畠とベタベタしている亜沙美を見ながら呟く。

＊

「ん？ここどこ？」

深い眠りから目を覚まし、知らない所に連れて来られて戸惑う亜沙美。

「ちょっと何これ」

天井から吊るしてあるロープで両手を縛られている。

「やっと目が覚めたようだな。実は俺、手にした女は縛り付けないと欲望を抑えられなくてね」

「コイツが皓一が言ってた例の女か」

阿畠皓一の先輩で阿畠が兄貴と慕っていると窺えられる20代前半くらいの若い男が子分と思われる複数のごろつきを率いてやって来る。

「何なのあんたたち。離して」

「嫌だね。飽きるまでお前をおかすんだ」

＊

ここは美人でスタイルのいい若い女性が裸踊りしている劇場。風俗に近い。

「あっ居た。マスター、さっき店に行ったら臨時休業って出入口のドアに貼ってあったからどこに行ったのか訊いて廻ったら」

「匡くんじゃないか。ってゆうか高校生がこんな刺激的なモノ見ちゃいかん」

「一という訳でな、あいつらはなヤクザの幹部で狙った女に麻酔を打って眠らせ、海の近くの工場に連れ込んで淫らな行為をするというとんでもない野郎共だ。しかも喧嘩滅法強いし：殺されたくないかったら関わり合いにならない方がいいぞ」

マスターが女の裸舞踊を見ながら語る。

俺はDSをしながらマスターの話を聞いていたがある程度要点が掴めた所で会場を後にした。

「あれっ匡くん」

マスターが俺がいけないというのに気付いたのは暫く経ってからだった。

＊

「いや、何でも言う事聞くから離して」

「この減らず口はどうにかなんないのか」バシッ

亜沙美の頬を平手打ちするボス氏。

キャー

「おおいねえ」

「おい、嫌がってんじゃねえか。やめろ」

デッキブラシを片手に持ち、方に乗せて激昂して言う少年が現れる。

「何だお前は？」

と、ボス。

「ただの通りすがりだよ！」

と言い亜沙美を縛っていたロープをほどいて亜沙美をお姫様抱っこする。

「匡」

と、俺に”怖かった”と言いたげにして抱きつく。

俺は亜沙美を安全な端っこ辺りに避難させ、デッキブラシを振り回しながら奴らをボコボコにしまくる。

＊

辺り一面阿畠とボス氏、それにごろつきたちが倒れていた。

「阿畠、もう二度とこんなバカなマネすんじゃねえぞ」

と、俺は言って、

「亜沙美ももうコイツみたいな変な男には捕まるなよ」

デッキブラシに両手をぶら下げながら廃工場を退去した。

＊

「あばたもえくぼ、そいつを好きになれば、そいつの欠点まで好きになってしまう例えだ。まあこれといった例はない。それと阿畠は暫く学校来ないらしい」

「珍しいね。その例えでダラダラしているのに」

と、瑛美。

「（いやだ。あたし何で匡を意識してるの。あの男はタイプじゃないし、まさかあれがきっかけで落ちちゃった！？）」

「何ボーってしてんの？」

「いや何でもない」

「変なの」

「熱でもあるんちゃう？」

と、覚子。

「大丈夫」

匡「亜沙美、『日本国内チャネル数格差の問題』とか『消えた年金』とか色々社会問題が山積みなのに暢気にボーッとしてる場合じゃないぞ」

「…」

知らぬ間に亜沙美を落としてたなんて今の俺は全く気が付かなかった。

12◆渡る世間に鬼はない

「あっちもこっちも揃って担当が外出しているなんておかしいだろ。もしかして俺、人間自体嫌われてんのかな。何もしてないのに」

俺があまりにも冷た過ぎる世の中に絶望しかけているときだった。男の子と女の子の2人が、迷子になったのか？、グスングス泣いている。

彼らの脳裏には角が生えた老若男女の人々が浮かび上がっているようだ。哀れなことに。

「どうしたんだ？そんなに泣いて。お前ら兄妹か？」

と心配そうに話しかける俺。

「うん。パパとママとはぐれちゃったの」

と、男児。

迷子のようなだ。こりゃ…？

「さあ交番行こう。世の中心が俺の財布の中みたいに冷たい人ばかりじゃないから安心しな。『渡る世間に鬼はない』って言うだろ。まあでも渡る世間は鬼ばかりっていうドラマもあるけどな」

と、彼らを率いて歩き出す。

「ああ絶望的なタイトルの割に結構面白いよね。でも本当の逆の意味のことわざは『人を見たら泥棒と思え』だよ」

と、女兒。

「お前そんな難しい言葉よく知ってるね」

と男児は自分のマイシスターが予想外の知識を持っていた事に感心している。

そんな端から見ればハンパじゃないくらいのくだらないやり取りをしてると交番にあつという間に着いたのである。まあこの年齢1桁台の子供2人の、保護者に相当する人物が現れるまでの子守は後はお巡りさんに委託しようと思っていたのに：

「すみません、こいつら迷子なんですけどもー」

出入り口の入ってすぐの机で仕事を早く片付けようと、必死になっていた本官氏だったが、

「迷子？その、大きい方はいくつ？」

「5歳」

「お名前は？」

「山椎豪（さんしいこう）」

「3 4 5！？これまた変わった名前だな。そちらの小さい方のお名前は？」

「ええっ…と山椎ー」

と、ツインテール女兒が自分のフルネームを言おうとしたとき、

「お巡りさん！助けて下さい！駅前の駐輪場に置いてあった自転車がないんです。クッソオオオあれ高かったのにい」

と、18〜19歳くらいの青年が本官氏に飛び付いて来た。

「何だって！君たち、悪いけど他回ってくれ」

と言い残し、

「こっちです」

自転車が盗難にあったという青年に案内されながら走り去って行った。

「おいちよつと！お前…じゃなくて一応向こうが年上だからあんたか。…あんたそれでも街の平和を守るといふ立て札を掲げた警官か
ああ」

と、口の左右に手のチョップを添えて叫ぶ俺。

「しょうがない。他廻るぞ」

こりゃ長旅になりそうだ。

デパートの迷子コーナーは、町の迷子は面倒見れない方針になっているし、隣町まで行くか。

ま、いいか…俺には心配する家族が居ないしね。

＊

「すみません、こいつら迷子なんです」

「あらまた。君たち、名前なんかな？」

また横取りされなきゃいいがという祈りも空しく、

本官氏その2の机にじっと大人しく居座っていた今時珍しい黒電話がけたたましく鳴り響く。

本官氏その2は咄嗟に鳴り響く電話の受話器を取り耳に当て、

「はい、こちら世田谷ー」「えっ空き巢！？すまねえな君たち。今出勤要請が入ったんだ」

おいおい、どいつもこいつも捌けないな。どうするんだよ。

これを循環的に繰り返すのも嫌だから、俺が子守するか。

＊

ここは見る限り何の変哲もない滑り台しかない公園へと辿り着き、ちび達とボール遊びをしていた。

豪「ねえ天然パーマ、もっと強く投げてよ」

と、ダメ出ししながら俺にボールを返す。

匡「その呼び方辞めてくんない。？気にしてるんですけど。俺名前匡だから、どーせなら匡くんって呼んでくれ」

と言ってまた坊主にボールを推定30〜40km/hの速さで投げ

る。

「ママ、何してるのかな？」

と女兒が言う。

「心配するな小娘。きっとお前らの母さんどっかで生きてるからその内見つけてくれるさ」

「ホラ、向こう見てみい」

俺は遠くを指を差した。

「スカイツリーが見えるの解るか？」

女兒「うん。見える」

豪「2012年の完成を目指して着々と建設が進んでるね」

コイツらが純粋な内にこんないい風景を見させるなんて俺いい奴だな。

「匡くん、俺将来溶接したい」

と豪が言う。

「おう。目的があるのはいい事だ。そこのお嬢は将来の夢は何かかな？」

「ええと私は：獣医かな」

風景に浸りながら答えた。

「なるほど、俺みたいに目的がないのはダメだぞ。でもどうかな、バブルが崩壊して以来ずっと不況やからな。下手したらこの不況が益々深刻になるぞ。なんとかして阻止しないと」

「何暗くなってるの？」

と、豪。

「いや、俺こう見えて小心者だから」

「あっ、居た」

と、そこに女兒に顔立ちが若干似た女性が近づいて来た。

「もしかしてあなたはこの子たちのお母さんでいらっしやいますか？」

「はい。」

「ママァ」「ママァ」

一斉に母親の衣服にしがみ着く子供たち。

「ウチの子の子守してたんですか？」

「そっすよ。おいお前ら、もう迷子になるんじゃないぞ」

と、言い捨てるように言う。

すると母親氏が悪びれたようにして、

「ありがとうございます。お礼といっでは何ですが…」

手作り菓子と思われる物体を差し出して来た。

何かこっちが悪い事したような衝動に駆られる。

気になってホイルで包んである中身を覗くとやはり美味そうなニオイを放つ1キレのパイだった。

「おいお前ら、もう迷子になるなよ」

豪「うん」

女兒「バイバイ匡くん」

「ああ。もうこれつきりになるかもしれないがな」

何か不思議な1日だったね。

＊

匡の住むマンションの匡の部屋の門前にとある人影が居た。

「匡の奴どこ行ってるんだ」

と東條。

人影の正体はコイツだった。

するとその隣の部屋の住人の40代位の禿げたオッサンが出てきて、

「小僧、お前ここで一人暮らししている小僧の知り合いか？」

「はい」

「あの小僧は朝からずっと出掛けたっきりだ。暫くしてから出直しな」

とオッサンが東條に淡々と匡が何で留守にしているのか語る。

「あいつどこほつつき歩いてるんだ。せっかく遊びに来てやったのに」

「まああの小僧は聞いた話によると用が住んだら気晴らしに散歩する習慣があるらしいからな」

「…マジかよ。匡の奴ほんと自由人だな」

と、来た道を帰って行った。

＊

「ヘックション、誰か俺の噂しているだろ」

男性の推測通り繁華街を散策していた匡であった。

13◆笑う門に福来る

いかにも不幸せそうな家庭があつた。

「部長物凄く腹が立つ」

と、家長的存在の父親。

上司に対する愚痴をブツブツ言っている。

今にも首を吊って自殺しようとしている青年が、

「何で受からないんだ」

何回も浪人している息子さん。

「バブル崩壊による不況から立ち直れないでいる日本の経済に絶望した」

就職が決まらずネガティブになつてゐる娘。

「更年期かしら」

すっかり社会問題と化した更年期障害に苛まれている母親。

完全に笑顔が消えてしまった家庭の屋根には、痩せ細った容姿で憂鬱に苛まれ元気が無いという印象の貧乏神が住み憑いている。

＊

「何が不況だからって挫けるな。何事も楽しみさえ持っていればいいだけの話」

と家長の父親。

こちらの家庭はポジティブのようだ。

「確かにあなたの言う通り。更年期だからってテンション低そうにしていたらよくないわ。芸能人の熱狂的なファンになっていれば自殺する気も失せるし。『冬のソナタ』いいよねえ『ユンさまぁ』って叫びたい衝動に駆られたわ」

と、ハイテンションな母親。

「恋をする事で心と体にいい影響を与える。勿論漫画アニメで主人公とヒロインの恋の行方はどうなるか楽しみに見たりするのも同様だ」

と、典型的なプーでもハイテンションな息子。

「あたし最初はネガティブの塊で一時は自殺を考えたほどだったけど先輩に一目惚れしてからすっかり明るくなったわ」

と、娘。

「あの家は明るそうだからあそこにするか」

福の神は明るい家庭が好きなのである。

＊

「一という訳ですね先生、たまには笑わないと福が逃げてしましますよ」

と、俺。

「ウム：確かに『笑う門に福来る』と言って怒ったり泣いてばかり居ると幸福が逃げてしまう」

と、担任大河内が難しい表情になる。

「俺こないだわざわざ先生ン家まで赴いてHDDハードディスクレコーダーを修理してやったじゃないですか。それでチャラでいいでしょう」

実は俺、遼太郎や東條と教室で暴れていて教室と廊下を隔ててある窓のガラスを割ってしまい、どうにかして担任大河内氏を怒らせぬよう色んな話題で誤魔化していたのである。

「それもそうだ。星にはこれに関しては感謝している。もしお前が居なかったらウチのあのレコーダーは壊れて録画出来ないままになっっているからね。でも」

大河内は口を詰まらせてから、

「こんな事しやがって笑ってられるか！怒らずにいれるか！舐めてんのかコラアアア」

まるでアルプス山脈が爆発したかのように激しく激昂。

匡「…ごもつとも」

ビクビクし後ろ頭を掻きながら謝った。

「佐々木！東條！お前らも同罪だろ！こっち来い！」

と、カンカンにキレている大河内。

「こんな事してェお前ら小学生か！ンなこてー」

内容は省略させてもらう。

俺ら3人は大河内にボロクソ怒られた。

＊

「ハアマジやぜかった。匡が口八丁で誤魔化してくれると思ったのに」

東條が疲れ果てた状態で言う。

まァ俺も佐々木も同じ状態だが。

「笑ってれば福がやって来るけどさ、それでも不幸せな家庭は玄関に『ウチは貧乏です』なんて書いてある札や貼り紙を貼るそうだ」

そしたら貼った主が配偶者の父親に怒られるというオチになった例もあるから、あまりお勧めは出来ないね。

＊

「坊主、お前から何か特別なオーラを感じるのう」

と、道端に座り込んでいた腹が出て、アゴヒゲを生やした老爺。

「坊主って俺の事か？それと爺さんの持ってる袋少し変わってますね。何かのコスプレですか？」

と俺は言う。

「匡、このじいさん知り合い？」

と、亜沙美。

匡「いや」

「コスプレもクソもねえよ。儂は福の神じゃ」

と、老爺。

「何訳解らない事いつてんだ。そんな神なんて想像上の存在に過ぎないだろ」

俺はその老爺にツツコミ兼相槌を入れてやった。

老爺「だからそれがここにいるんじゃない」

「じゃあ爺さんよお、あんたがほんとに福の神だと言うのなら証拠を見せてよ」

「証拠！？だから…」

自称福の神という爺さんはボタンを押すように人差し指をポンと突き出し、おまじないを唱えた。

「亜沙美、何か知らんけど幸せだな」

「そうよね」

ワハハハ、

って何が起きたんだ？

「これが福の神の力じゃ」

匡「まさか…あんた」

亜沙美「本物!？」

老爺「だからさっきからそう言ってるだろ」

? 「おい、お前ら何だかヤケに楽しそうだな」

と、顔がビビるくらい真っ青で痩せ細った男性。

「あんた誰？」

と、俺。

「俺は貧乏神だ」

と痩せた男性は言う。

正に福の神居れば貧乏神も居るって事か。

老爺「何じやお主、幸福な奴等に嫉妬しているのか」

「その為に俺は要るんだ。今から爺さん、そこのガキ共と一緒に不幸のドン底に叩き落としてやる」

俺らの方向に人差し指を差し強張った表情の貧乏神（自称）。

「何あいつ？あたしたちをどうする気なの」

「知らん、とにかく逃げるぞ」

「おい、君たち。儂を置いて行かないでくれ」

と、自称福の神の老爺も俺と亜沙美の後を追うように重たい尻を必死で動かして走る。

＊

「ハアハア、何なんだいったい」

何とか逃げ切れたようだな。

「爺さん、あのガリガリ知り合いなの？」

「あああいつとは腐れ縁での、顔を合わせればいつも対峙していた」

回想シーンに入るぞ。

＊

「おい、福の神、お前幸せそうだな。すぐに不幸にしてやる」

と、ガリ痩せでキズだらけの40代くらいのオッサンが宣言するよう
に言っている。

「できるもんなら…やってみろや！」

担いでいた袋を武器にするつもりだろ。

オリヤー、

と、両者を譲る事もなくドンパチ激闘を繰り広げていた。

＊

老爺「一という訳じゃ」

「イメージ通りなのね。福の神と貧乏神が仲悪いの」

「アイツとはもう長い間対立しているんじゃないよ。ほんとに戦いたくはないのによお」

「おい、もう追っ手が来たようだぜ」

と、上に人差し指さす俺。

「よお俺様…いや貧乏神の呪いから逃げ切れると思うな。待て」

あいつ半端なく足速くなってねえか。さっきと比較して。

その後も貧乏神との追いかっこは続いた。

気づいたら俺と亜沙美が2人で意味もなく駆けていた事になってい

たのだ。

「あれ、亜沙美ちゃん、あの爺さんは？後ろを見てもガリガリのオッサンも居ないし」

「ほんとだ。あたしら幻を見てたのかな」

幻か…確かにこのところ課題に追われて疲労がピークに達していたからそうかもしれない。

「なんだかんだ言っても2人共どっかで生きてるだろうよ」

「そうだといいわね」

＊

「ケントさん、あの匡って坊主、親殺害されてんのによく暢気にしてられるなあ。どう思う？」

「俺たちは絶対に正体をバラされてはダメなんだ。まああの小僧は目的を忘れてるが、そこを襲って奴を俺たちの操り人形にするんだ」

ケントと呼ばれた兄貴分は基本人殺しをメインに行動しているが、俺を操り人形にするつもりでいたなんて今の俺本人は知る由はなかった。

「操り人形！？殺すんじゃないか？」

「おい、ジュウシロウ、お前ターゲットを殺せばそれでいいって思ってたねえか？それはとんだ勘違いだ。利用しないであの世に逝かせ

てしまったらもったない人材だって居る。特にあの星匡とかいう小僧は顕著だな。奴を俺の奴隷として働いてもらいやがては俺らの罪を被って死刑になるんだよ」

＊

「ああ疲れたなあ」
この気配は。

玄関から自宅に入ろうとしたとき、妙な違和感を感じた。

まさかこの近くに奴等（SK2）が…まさかだとは思うが俺は追いかける。

アイツらをボッコボッコのギッタギッタにぶっ潰すまでは。

14◆東京の仇は長崎で討つ

「父さんの死、無駄にしないぜ」

父親を亡くした武士が墓前で泣きながら言う。

＊

ここは肥前（現…長崎）

そいつの仇敵である侍を待ちわびていた。

「おい、こんな所に呼び出して何をする気だ？」

と、仇敵侍。

「フッ、父の仇！」バサッ

うわああ、

と大量の血を噴き出しながら仇敵侍は言う。

いやいや、これは明らかなる不意打ちだね。

いくら親を殺されたからってそんな卑怯極まりないな手は使っていない事にはならんだろ。

今のは今回一発目のツツコミである。

「一何だこれ。この時代劇ちつともカッコよくない」

テレビを見ながら言った俺。

「俺も、SK2を長崎に誘き寄せてからそこをバサって皆殺しにしようかな」

この小説は作者の唯一の東京が舞台の作品である。

＊

「やられたあ」

少年たちが公園で時代劇ごっこをしている。

「己エおじさんの仇」

少年がおもちゃの刀でもう一人をバサくと斬るフリをする。

「元気なもんだ。ガキン頃この公園で遼太郎たちとよく遊んだな」

と、思い出に浸りながら両手をポケットに入れ、テンション低めで公園を後にしようとしたときだった。

「君が星匡くんかい？」

「誰だお前」

「俺か？SK2っていう組織のメンバーの1人で怜だ。兄貴たちの話によると坊主、お前殺された両親の仇を討つためにSK2をボッコボコにぶっ潰すのを生き甲斐にしているみたいだな」

「だから何だ。そんな事させるか、って言って俺を捕って惨殺しようなんて考えてんじゃねえだろうな？てめえらは指名手配中だぞ。しかも懸賞金が700万円だと。オウム真理教の3人よりも上回ってる。てめえら警察からあの3人よりも嫌われてるからね。下手に街を彷徨いたらピンと来た周りの人間に通報されて即御用だからね。という訳だから顔は伏せといった方がいいぜ。精々逃げ回ってくれ：俺に殺されるまでな」

と言って俺は歩き出す。

「いい度胸してんじゃねえかあの小僧」

俺は所持していたニット帽とサングラスを装着しながら言った。

＊

「あんたいい加減就職しろよ。いつまで親の脛かじってるつもりなんだ」

俺は屋台の夏祭りの屋台に出てたおでんの飲み屋で第8話”対岸の火事”に出てきたオタク野郎と飲んでいた。

「したくても出来ねえの。100年に1度に来ると言われている不況だからな。まあ喩え就職できても仕事場での上下関係に嫌気が差してすぐに辞めてプーに逆戻りするケースも相次いでいるという話だ。にしても『サムライうさぎ』のしのちゃん可愛い」

と、こいつは工文だ。

「語り口調だけはいっちょまえだな。しかもあんたキモいって」

その後も飲みながらトークと飲み歩きは深夜1時すぎまで続いた。

＊

オウム真理教特別手配書を眺めている髭が濃いやせ形の男が居た。

「俺、とんだ有名人やん」

「ん？あんたどっかで見た事あるような…お前は平畑信！」

と、お尋ね者を目の前にして驚く怜。

「そんなあんたも指名手配犯だろ。ホラ」

平畑はオウム手配とセットで掲示してあったSK2の指名手配書を指差しながら言った。

「俺らは600万懸けられている中あんたらSK2とやらは700万って余程嫌われてるなあ警察の連中から」

「てめえらは俺らの足元にも及ばねえってこった」

平畑「あんたのリーダー格のこいつら2人はどこにいるの？」

怜「んな事喻え相手が同じく指名手配犯とも言えるかあ。寝ぼけるなあ」

「別知らんでもいいけど」

と言って平畑はその場を退去した。

匡「イッテ…誰だ？俺の頭にテニスボールぶつけたのは」

「すいませーん大丈夫ですか？」

とラケットを手にした容姿の美しい女性が素直に名乗り出てきた。

「はい。大丈夫ですよ。お気になさらずに。これ、あなたのでしょ」と俺。

「ええ」

「気をつけてください」

SK2というのは以前何度か出てきた2人だけじゃない事が判明した。

15◆能ある鷹は爪を隠す

俺は、明日から期末試験がある。

俺的には、逆に部屋の中がまるで仏様みたいにシーンとなっていたら、逆に集中できないし、落ち着けない。

「・・・俺、今どっちに考えが行ってたんだ？ うっ・・・頭がイテエ」

寝転びそのまま寢床に就いてしまった。

虻蜂取らずか。両方を得ようとしてそれが仇となり、結局どちらも習得出来なくなってしまう。

＊

翌日―

匡「なあ、今日から1週間テストがあるぜ。勉強したか？」

遼太郎「ああ、ちょっとな。俺絶対赤点だ。あーあ、補習嫌だな」

東條「俺、夕べ夜中3時まで勉強してたぞ。どこが解らないんだ？ 教えてやるから」

匡・遼太郎「おお、天の助け」

「えーと、こことこことー」「俺ね、ここ・・・これとー」

＊

数日後、テストが帰ってきた。

「やっぱり勉強は4，5時間しないとダメだな」

自分の手元に戻ってきた答案用紙を見て、頭に石をぶつけられたみたいにかんがんとするのも無理はない。
だって18点だったんだから。

「亜沙美、答案みてえ」

「いいよ。ホラ、」

90点とは。対したもんだ。

「うわあすげーなお前」

「林さん、君みたいなまともな人材は老後は確実に安泰だね」

と東條。

コイツは99点採っている。答案を何故か自慢することなくまるで鷹が獲物を捕まえる為の鋭い爪を隠すかのごとく敢えて隠している。

＊

「能ある鷹は、爪隠す」

「何だそれ？」

「意味は、固有の取り得があるのに普通ぶっている奴の事を指す。例えば――」

ボクサーなのに、喧嘩を好まない一般庶民のフリをしながら、かつ上げしようとしている、チンピラと戦ったり、常に学年トップクラスに君臨していて東大も夢じゃないほどなのにも関わらずあまりレベルが高くない学校に通ったりする。

「ム○ブにします」

と、ダイ○ツ店に車を買いに来たおじさん。

じつは、コイツ、資産家の親を持つ御曹子なのだ。

「コンパクトな割りに荷物をいっぱい積み込めますけど、いいんですか？」

と、店員が訊き返す。

「はい。いいです」

このように金持ちでも高級車でなく、一般のあまり高級じゃない車を買ったりするのも今回のタイトルに相当する。

「実は、あたしもこの間――」

＊

「コラアアア、お前かぁ、小娘エ、ウチの店の前に犬のフン散らかしたのは」

突然文房具屋のオッサンが亜沙美に怒鳴りつけてきた。

「ちょ…ちよっとオ、何の話？第一あたしの家犬なんか買ってないし」

「ウソつけ！何を根拠にそんな事言ってるんだ。エッ！」

？「ほら、辞めな。大人気ない」

年輩の割に容姿端麗な女の人が仲裁に入る。

「…うるさいお前には関係ないだろ」

とオッサン。

すると女性はリンゴを取り出し、それを素手で握り潰した。
それも決定的瞬間であり、恐るべし、とも言えなくもなかったという。

「…すいませんでした」

咄嗟に頭下げるオッサン。

「大丈夫？」

「はい、心配には及びません」

「あのオッサン、そこまで悪い人じゃないから気にしないでね」

と言い女性はその後にした。

「あの人どっかで見た事あるような…」

どこで見たのか思い出すのに数分かった末に、

「あっ!？」

全国的に有名な某演歌歌手だったそうだ。

＊

「一そりゃ隠しとかなきゃ、堂々と公表してたら近くに居る奴らがカメラ機能を起動させたケータイを回しながら大騒ぎして混乱に陥るぞ」

東條が言う。

「自分には特有の取り得があるからと言って、自慢してたら色々痛い目に遭うからね。能があっても隠しとくのが一番だぜ」

＊

「ところで匡、テスト何点だったんだ？」

不意に東條が聞いてくる。

「えっいやあ（チクショウ：18点なんて書いてる答案用紙なんか見せたら何言うのか解ったもんじゃねえ）ごめん無くしちゃってな」

亜沙美が無言でこのやり取りを眺めているのを背景に、後から覚子

がやって来て、そいつも眺め始めたのだが、んな事に喰い付いていない場合ではない。

「怪しいな」

さすがこいつ。

目が鋭いぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045j/>

行きがけのバーン・ボーイ（休載）

2011年11月12日16時22分発行